25 journal
society&business Tokyo25 journal
執筆協力 編集室システムU　okamura.nobuyoshi@gmail.com

平和、幸福　深まる願い

縁起物の「豆太鼓」を手作り

日の出町の新井豆太鼓保存会

日の出町大久野の新井地区では今年も縁起物の豆太鼓を作り新年を迎えた。「成人の日」の1月8日には「どんど焼き」を行った。

完成した豆太鼓を手に新しい年を迎える新井豆太鼓保存会の皆さん

豆太鼓作りは10月から新井豆太鼓保存会の会員らが作業場に集まり、132本を全て手作りで仕上げた。福を呼ぶ豆太鼓は大みそかまでに自治会の希望者のほか、公的機関、地元企業などに配布された。

豆太鼓づくりは1929（昭和4）年ごろまで行われていたが戦争で中断。戦後もそのままになっていた。有志の手で新井地区に復活して30年余りになる。

昔ながらの作業には大きな苦労がある。竹を削って柄を作り、ヒゴを編んで風車を作る手の込んだもので、太鼓は和紙を張り、のりを混ぜた赤いポスターカラーで塗装する。作業前には山へしの竹の伐採に出かけ、太鼓枠の紙筒の切断などを行う。

赤い太鼓の表には越沼正好会長が干支の龍の絵を一つひとつ手描きした。えんぴつで下書きし、白いポスターカラーで龍の鱗まで丁寧に仕上げると、手描き時間は30時間を超した。絵を担当して21年目のベテランも大変だった。裏には柁原亜希子さんの書で、平和、幸福、絆、安泰、隆盛など誰もが望む1年の願い事が書かれた。

平和、幸福の願いがこもる

豆太鼓の柄の長さは40センチほど。太鼓は直径13センチ、厚さ2・5センチで、大豆を両側に垂らし、回すと勢いよく太鼓に当たり〝ポン、ポン〟と軽快な音がする。昔は子どもの遊び道具だったが、「まめに働く」などの意味から商売繁盛を願う縁起物として各地に伝わった。

作業に当たった会員は20人。この10年余りで他界した会員も数人いるが、次の世代も加わっている。

越沼正好会長は「今年は羽の色をより明るくしたり、平和と幸福の字の入ったものを増やした。世界では紛争が続いているが、早く収束し、豆太鼓の願いのように明るい世界、地域社会になってほしい」と話した。

「どんど焼き」被災地に心痛め防災意識新たに

伝統行事を継承　自治会と子供会が共催

どんど焼きは多くの願いを込め燃え上がった

新年に無病息災を祈る「どんど焼き」が1月8日、西多摩各地で行われた。このうちコロナ禍で中断し、昨年再開した日の出町大久野の新井地区では、子どもから高齢者まで60人あまりが正月行事を楽しんだ。

新井自治会と同子供会が協力し、竹で組んだ約4メートルのやぐらの中に古いお札やお守り、正月飾りなどを入れ、回りを飾り付けた。辰年生まれの小学6年生、斎藤大智さんと安本奏梅さんが点火。「パン、パン」と竹が弾ける音を立てて燃え上がると歓声が上がった。朝の冷え込みが残る会場では甘酒などが振る舞われた。

点火前に行われた開会式で、宮田賢吾自治会長は「皆さんの協力で準備が整った。正月早々、能登半島地震が発生し心が痛む。一日も早い復旧を願うばかり。首都直下地震など、いつ起こってもおかしくない状況にあり、防災意識を強く持っていきましょう」と話し、大久保尚美子供会長は「地域のつながりを大切に、伝承行事を守り楽しんで」と呼びかけた。

点火する斎藤さんと安本さん

開会式を前に記念撮影。この後も多くの人が集まってきた

「どんど焼き」の会場は民有地を使っているが、2019年までは地区内を流れる平井川の中州で行ってきた。同年の東日本台風の洪水で道路が寸断されるなどの被害が出て中州も消滅したため変更された。参加者は口々に防災の大切さを確認していた。